

# 「暗黙知」の体得と「階層構造」の意義 「創発」の機制と熟達の諸条件をめぐって

柴田 庄一 遠山 仁美

## はじめに

たとえば、「ビートたけし」であっても「北野武」でも同じことであるが、その顔を描くよう<sup>しょうよう</sup>懇懇されて、首尾よくしかるべき似顔絵をものする人がはたして何人いるだろうか。むろん、いないわけではなからうが、その数が一定の限度内におさまることだけはとうてい避けられまい。とはいえ、たとえ目・鼻や顔かたちの細目にまでわたり逐一明示的に表象しえない人たちでさえ、まるごとの容貌やその独特の人相をまるで思い浮かべることができないのかと言えば決してそのようなことはないであろう。

あるいはまた、自転車に乗れない大人など、今時よほどの例外を除いてほとんどいないものと思われるが、それにしても、これから自転車の走行練習を始めようとする子どもたちに、乗り方の仔細を事細かにことばで説明できる人の数はさほど多いとは考えられない。このように、ひとの容貌を見て同定するような認知行為だけでなく、体を使って行なう運動的行為においてもまた、われわれがいちいち意識化することなく、暗黙裡に執り行っている行動は必ずしも少なくはない。

このような、とかく言語化しては表明しにくい人間の「知」を、マイケル・ポランニに倣って「暗黙知」と名づけるとすれば、それはまた、文字通り、ことばで語る以上のことを身体がわかまえているということであり、ほとんど自動化して身体が覚えているという意味で、「身体知」と言いかえることも許されよう。本稿では、「身体知」ないしは「暗黙知」と呼ばれる「知」のありようとその体得の諸条件を探るに当たり、どうやらその本質をなすと思われる階層構造に着目し、今一步、問題の所在を掘り下げて検討してみようと思う。

## 1 「学習知」と「身体知」

ところで、人間の知には、学校における授業などを通して教授される「学習知」と、場数を踏んだ実践的な経験を通して初めて得られる「身体知」との二種類が挙げられる。前者は、何十人を相手にした教室においても教授可能であるのにひきかえ、通常、後者は、マン・ツー・マンでの継続的な練習や作業現場における実践的伝授を通してでない

と、なかなか身に付けることが容易ではない点にその著しい特徴をもっている。とりわけ身体知は、学習知が概念的・抽象的たりうるのとは対照的に、それを執り行う人とともに、身を置く場の具体的な環境や状況にも、大いに規定されざるを得ない。このように、技能をその代表例とする「身体知」には、当事主体と場が欠かせない前提条件をなしているが、その際、見落としてならないのは、場が具体的であればあるほど、その特性をひとしなみに取り扱えないのと同じように、人にもまた、体型や資質といった諸種の個人差があるという点であろう。これらを適切に考慮するためには、個々の具体的な諸条件を把握することが不可欠で、人と現場感覚抜きには達成されえない技能の習得には、したがって、学習者各人の個体差に見合ったきめ細かな指導がもっともふさわしいということにならざるを得ないのである。

たとえば、ひとの筋肉には、持って生まれた差異と適性があるとされるが、それに加えて、人種的な体力差についてもまた相応の注意を払っておくことが必要かも知れない。長年の間、現役選手として活躍した元ハンマー投げ選手の室伏重信によれば、今日のようなきわめて高度なレベルにまで達した競技スポーツの世界においては、人種間の体型や体力差が決して無視し得ない重大な影響を与えることを考慮すべきだという。「スピードを高めるためのエネルギーは体力にある。この体力には、筋力、反応能力、持久力の三つの要素があるが、これらはいずれも、トレーニング刺激によって高められる。」<sup>1)</sup> といえ、そこには、「人種間において、器の大きさに差が見えてくる。」すなわち、「体力の中で、反応能力や持久力においては白人、黒人、アジア人にあまり差はない。しかし、筋力においては、明らかにその差が出てくるのである。」その結果、「筋力の差によってパワー系の競技スポーツにおいては白人選手に、先天的な体型の差によってスプリント、ジャンプ系のスポーツにおいては黒人選手に有利であること、これは動かせない事実である」(『その瞬間にかける』48 - 57ページ) という。このような相違はまた、生まれつきの筋群が持久系であるか、あるいはまたパワー系に属するのかというタイプの違いとしても表われるとされ(同上139ページ)「地面と重力によって、人も動物も動くことができる」(同上87ページ) という地球環境の制約を免れえない宿命とともに、決して忘れる事のできない影響要因となっている。何でも「やればできる」式の世界万能論を戒めるという意味で注目すべき発言であると言える。<sup>1)</sup>

## 2 芸道修行の実際と環境への馴致

芸道の現場とそれにふさわしい環境への馴致によって培われる「身体知」の具体例として、まずは、伝統的な芸道修行の実例に目を向けてみよう。総じて言えることは、そこで教えられることと言っても、せいぜい見よう見まねの模倣訓練が一般的で、「習う

より慣れる」が優先されていること、また、初心者に課せられることはと言えば、当分の間お茶汲みや下足番等の雑用でしかなく、どうやら環境に馴染むことこそもっとも重要視される要素であるらしいという点であろう。そうした事情についての考察は、各種の芸談をひも解けばそれぞれ枚挙にいとまのない次第であるが、ここでは、光森忠勝『伝統芸能に学ぶ 躰と父親』（恒文社）により、代表的な言述を採録してみることにしたい。

まずは、文楽の豊竹十九大夫の芸談の一説。

やはり子供の自分からやっていますと、自然に耳に入っています。ここへきて、ま、ブラブラ遊んでましてもね、いろんな演し物にしましても自然に耳に入ってきますね。それが強いですよ。邦楽というものはそれが財産になりますからね。ある程度の年代にきて、同じようなところにきたとき、子供のころから修業しているのとそうでない子では、その差というか、ちがいが出てくると思います。やはり日数かけて、あるいは年月かけて覚え込んだものはなかなか忘れようにも忘れられません。体に染み込んでいますから。とくに大夫の場合は一旦入れたものを消化して、自分のものにしますから、年数たちませんと、これはなかなかできません。そういった取り込み方を、どんどん子供の時分にやってくると、ずいぶん楽ですし、芸の勘どころを押えるのが早いですわ。(91ページ)

ここでは、時間をかけて咀嚼することの重大さとともに、たとえ遊びの序<sup>ついで</sup>ではあっても「自然に耳に入って」くることにより、「体に染み込」ませて覚えること、つまりは、「芸の勘どころを押える」ことの重要性が強調されている。

また、次に紹介する市川猿之助の述懐から読み取れるのは、歌舞伎の独特のリズム感<sup>は</sup>、決して分析的指導や理屈で覚えられるものではなく、環境に身を置き、習得目標である楽曲に繰り返して接することにより、ようやく無意識的な体得と伝授が可能になると

---

1) 個体差とフォームとの相関関係の具体例として、たとえば、一本足打法の王貞治、トルネード投法の野茂茂雄、振り子打法のイチロー等の事例を挙げることができる。これらの個性的フォームが、他の何人によっても模倣されえないのは、いかに個体的諸条件との親近性が強いかの証左であろう。また、人ごとに個体差があるというだけにとどまらず、たとえ同一人物でも、体調その他、その時々コンディションの都合によって常に一定の調子を保つことができるとは限らない。心・体・技の調和の頂点で、すなわち、スピードとリズムとタイミングの総和が閾値となる瞬間において最高のパフォーマンスを競い合うハンマー投げのような競技スポーツにあって、好調の波を持続することがいかに至難の技であるかは、室伏重信の著書『その瞬間にかける』（原生林）に詳しく、かつまた興味深く語られているところである。

いう事実であろう。

歌舞伎には独特のリズム感があるわけですね。それは教えて教えられるものではありません。自然に体に生まれてくるわけでしょう。この世界に浸ってなきやダメなんで、小さいときからいる子は、そういう浸りが長いからいいんですね。外から入ってくると、それが身につくまでが大変なんです、意識なく体で覚えるまでが。頭じゃないですから、その世界にしょっちゅう、しょっちゅういないと覚えられないし、発酵してこないでしょうね。理屈じゃないわけですから。台詞のテンポに独特なものがあるわけですよ。それは音譜でも表わせられないし、五線譜でも表わせられない速度がある。つまり、そういうリズム感、一つの台詞の間の息つき、間の取り方が、役だけやろうとするとダメなんです。だから、普段が大事なんです。役がきたからといって、いきなりできるわけではないんです。(229ページ)

ここでもまた、熟成してくることの重要性とならんで、何度も「頭じゃない」、「理屈じゃない」と指摘される点が注目されるが、そのようなポイント、すなわち意識や理屈で覚えようとするものの不都合性については、狂言の野村万作もまた、次のようなことばで語っているところである。

ことに、大学を卒業して入ってくると、意欲的ではあるが、頭が勝っている。子供のように何も考えずに師匠の言ったとおり真似ができないらしい。意識が邪魔をしているのだ。そのため、台詞が生き生きとしてくる基本の良さを失っている。(107ページ)

こうした言辞に接していると、幼少時から身体で馴染むことの大切さがいかに尊重されているかに改めて驚かされるが、俗に言う六歳六月むっつむつきでお稽古事や芸道修行を始めることの意義については、京舞の井上流家元・井上八千代の次のような談話が参考になるかも知れない。

これも個人差ありますけども私どもの方へお見えになる子たちをみても、身体的な面でも、座る、立つ、という姿勢が、小さい子たちには難しい。始めの形の正座が、踵がたたないで引っくり返ってしまうことが、三歳ぐらいやったらあるんですね。数えの六つ、満五つないし四つすぎになってくると、そろそろそういうことも、たいがいできます。それにこちらの言うてることの意味も、多少わかるようになるみたいに思います。(190ページ)

自ら三歳で初めての手ほどきを受け、五歳で初舞台を踏んだ家元の、経験と実感に裏打ちされた言といえよう。しかしながら、ここでも留意しておくべきは、伝統芸能の世界では、いかに「型」や「基本」の習得が重要視されるとは言っても、何もそのこと自体が目的意識的に目指されているわけではないという点であろう。「基本」の会得には、もとより師匠の模倣が欠かせないが、単なるものまねや「なぞり」によって独自の芸風が樹立できるわけではない。そこでも求められるのは、詰まるところ演技者の「色」であり、かけがえのない「自分のもの」、すなわち個性に他ならない。この点においては、「型」は修業のための方法論であり、「叩き台」に過ぎないと語る野村万作のことが注目される。すなわち、狂言の修業にも基本の型はあるが、「型といっても、師匠から教えられた型であり、師匠の身体に叩き込まれた型なのだ。それだけに同じ師匠のもとについて修行した弟子のなかにも微妙な差がある。科学的に言えば、再現可能な形という意味の型ではない。いうならば、型はあるけれど、型がないというきわめて日本的な感覚でとらえるしかない存在なのだ。(中略)つまり、身体に宿っている、目に見えない髓を伝承するための手法なのだ。」(103ページ)

このように、数多くの宗匠たちによって異口同音に語られるのは、「型」を通して「型」を抜けるという工夫、つまりは、「型」の模倣に終始するのではなく、「型」を手掛かりに「型」を超え出る創造行為こそ、追求すべき要諦に他ならないというメッセージなのである。このことは、すでに九世・市川団十郎の芸談にも明らかで、伝統芸道の世界において「己が技芸」がいかに大切にされるべきかの所以のほどが示されている。

前賢故実を調ぶるは如何にも然るべきことながら、猥りに故人の遺型に拘泥することとは非事なり、故人の遺型とはつまり故人が演じたる長所をいふものなれば、之を参考として取捨するは自分の勝手なれど、之が模倣をするは悪し、畢竟他の真似といふものは己が技芸を束縛して、其長所をも湮滅してしまふものなり。<sup>2)</sup>

---

2) 馬場順『人と芸談』(演劇出版社)60ページ。同じような事情は、ヨーロッパ出自の芸術ジャンルにおいても当てはまる。例えば、クラシック・バレエ界のスター振付家ジョン・ノイマイアーもまた、ウィーンの日刊新聞“Kurier”のインタビュー(2004年4月29日付)に応じ、「バレエ・ダンサーが自らのスタイルと解釈を獲得するには、(先輩ダンサーの手本など)何ものにも囚われることなく、自己固有の道を歩んでほしい」とした上で、「バレエの伝統が真に生きるのは不断の革新によってである」と結んでおり、「型」の革新が常に不可欠の要諦をなすことは、洋の東西、ジャンルの別を問わないことの傍証となっている。

### 3 技能習得の最適期と臨界期

「学習知」とは対照的に、必ずしもマニュアルでは規定しがたい技能の習得過程を検討するには、上述の通り、ひとつと場のもつ特性や個別性を考えることが最優先課題であるとしても、もう一方では、いつから手ほどきを始めるのがふさわしいかに関する一般的考察もまた、あながち無視するわけにはゆかないポイントの一つであろう。その際、習得目標となる技能の種差によって、結論が一樣たりえないことはむろん言うまでもないことである。ここでは、管見に触れえた限りで、いくつか個別の研究事例に関連し、若干の検討を加えてみることにしたい。

そもそも人間は、この世に生まれ落ちてすぐには立ち上がることができない。這い這いから二足歩行に至るまで、ほぼ丸一年間にわたる時日を必要とする。首が座り、背筋が伸び、ついには手足の関節が自在に動くようになるまで、<sup>ただ</sup>直ちには準備の態勢が整わないからである。さらにそれ以前にも、母親の胎内にいる十月十日の間、<sup>とつきとおか</sup>発達と成長を続ける胎児は、実は、系統発生を繰り返しているのだという考え方がある。そのような見方をも考察のひとつの手がかりとするならば、ロシアの生理学者ニコライ A・ベルンシュタインの提示する階層性のモデルは示唆するところが少なくない。彼は、『デクステリティ 巧みさとその発達』(金子書房)<sup>3)</sup>の中で、進化史の最終段階にある人間の運動制御のレベルを四種類に区分し、「最も低次で最も古いレベルから、最も複雑で意味深い動作と行為を制御するレベルまで」次のように分類している。(131ページ)

- A レベル <sup>トーン</sup> 緊張のレベル
- B レベル 筋 関節リンクのレベル
- C レベル 空間のレベル
- D レベル 行為のレベル

まず、レベルAは、体幹と首の筋が担うもので、あらゆる行為の基底部分をなしているが、体肢の筋に緊張をもたらすとはいえ、その制御にはいまだ直接たずさわることはない。体肢の制御にかかわるのは、レベルBからで、こちらは、伸筋と屈筋の活動を調

---

3) ユダヤ人であったベルンシュタインは、後年、条件反射のパブロフ批判を行った等の理由により、不遇な研究者生活を送らざるを得なかった。その結果、すでに1940年代には執筆されていたらしい本書がロシアで出版されたのは、ようやくベレストロイカ後の1991年であったという。ここでは、昨年(2003年)紹介されたばかりの邦訳書(工藤和俊訳、金子書房版)により、そのページ数を示すこととする。

整し「動作のリズムを制御する。」(147ページ)このレベルはまた、経験を蓄積しつつ、筋 関節レベルの協応パターンを構築し、より高位レベルからの要請にいつでも応えられるよう背景調整を自動化するとされる。このようにして、「状況に応じたすばやい運動の解決法を見いだす準備」(149ページ)が整えられると、そうした二層レベルの土台を踏まえ、ようやく「巧みさ」が作動することとなる。すなわち、歩行や走行といった身体外部の空間場における身体の巧みさをレベルCが、「手のスキル」と呼ばれる手と対象操作の巧みさをレベルDが司るのである。これら四層のレベルは、しかしながら、それぞれ個々別々に機能するわけではもとよりない。より高次の動作と運動を制御するため、背景レベルの調整が行われ、両者が相俟ってスムーズな行為が成立するに至るのである。赤ちゃんの這い這いや二足歩行も、こうした四層レベルにおける運動制御のしかるべき賜物であると言っていい。

ベルンシュタインはまた、「巧みさ」を定義して、「あらゆる状況で、問題に対する正しい解決策をすばやく見つけるための運動能力、すなわちいかなる条件下でも運動の機転を示す能力」(258ページ)であるとしているが、そうした「巧みさ」は、むろん求められる課題に応じて様ではない。したがって、「巧みさ」を身に付け、どのような状況にも対応できる機転能力を養うには、いかなる場面でいかなるスキルが必要であるか、そしてまた、いついかなる形で手ほどきを始めたらいかにについて頭を悩まざるを得なくなる。その際、ベルンシュタインが提唱するように、行為と運動の構築に階層構造のモデルを設定することにより、技能訓練における最適期や、場合によってはその臨界期を検討してみる途が開かれよう。

現代における10人のトップアスリートの生い立ちを追跡した吉井妙子『天才は親が作る』(新潮社)によれば、イチローや清水裕保など天才的プレイヤー達の多くは、ほぼおしなべて3歳頃から何らかのかたちで基礎素養を培う練習を始めているとされ、併せて、3,4歳くらいまでには「脳神経のネットワークが形成される」(262ページ)という脳科学の見解をも紹介している。また、月本洋・上原泉『想像 心と身体の接点』(ナカニシヤ出版)の見解では、「乳児期には、主に無意識的に認知活動を行っているのに対して、4歳前後に内面を意識することが可能になるのにもない、自己の認知活動を意識的にコントロールする部分もでてくる」(166ページ)とされ、さらに「5歳以降になると、大方の子どもが、自己の心を、成人のように意識するようになる。この時期になると、内面を表す言葉の理解も成人に近いものとなり、言語を使って内省すること、可能になってくるものと思われる。自己の内面を、意識的に思いめぐらしコントロールするようになるため、想像やイメージを、自分が思うように操ることも可能になるだろう」(168ページ)と想定している。いずれも知育発達のプロセスをよく観察した上での所見であり、技能習得の開始時期を考える格好の手がかりとして注目されよう。

将棋名人の羽生善治もまた、『挑戦する勇気』（朝日選書717）の中で、『骨格』が決まってしまう時期は十代の前半である」（44ページ）とした上で、次のように述べている。

つまり、序盤の定跡<sup>じょうせき</sup>や高度な手筋<sup>てすじ</sup>といった情報、すなわち「知識」は、二十歳、三十歳、四十歳になっても身につけることはできるのですが、ある一つの場面について、「この場面ではこの手とこの手しか、選択肢はないだろう」といった、非常に抽象的であいまいな判断、証明するのが非常にむずかしい感覚的なものというのは、十代前半のときにある程度固まってしまうんです。（45ページ）

ここで「証明するのが非常にむずかしい感覚的なもの」とされるのは、「たとえば瞬時に現在の状況を判断し、たくさんの選択肢の中から、二、三通りの手を直感的に選り出す、そのためにほとんどの選択肢を切り捨てること。そういう判断とか勘のこと」（56ページ）を意味しており、こうした基礎感覚は、しかるべき時期を失すると効率よく培うことが困難になるものと思われる。同じことは、運動的行為の代表的事例のひとつである一輪車の走行練習にも当てはまる。

小学校の体育授業における一輪車の実技訓練を記録した根本正雄編『一輪車の習熟過程』（明治図書出版）に従えば、道具としての一輪車の大きさや基礎技能、とりわけ基礎感覚の涵養をも含めた生徒たちの諸条件を勘案すると、学習を開始する最適期はどうかやら3、4年生あたりの学齢期にありそうだとするデータが報告されている。そこにはまた、習熟までに要する時間数の概算を引き出すための計算式（「 $(4 \times \text{とし})$  時間」）が紹介されており、それによると、中高年の初心者にとって一輪車の習得がいかに絶望的なまでの困難を伴うものであるかが示唆されている。

さらにまた、幼児の言語獲得、とりわけ音の聞き分けについての別の研究によると、人間の乳児は、「遅くとも生後7、8ヶ月ですでにインプットの中の統計分布の抽出ができ、その能力を使って、母語の言語の音声的な特徴（母語において優勢な韻律のパターンや音素の共起関係など）を抽出している。そしてその抽出した統計的規則性を使って、切れ目のないスピーチのインプットを意味の単位である単語に分割している」という。<sup>4)</sup>このようにして、すでに満一歳になるまでに身に付くとされる語音の分節化能力は、通常、母語に対してパターン化されるのが普通なので、むろんその後接する外国語の聞き取りにとっては一種の障害要因とならざるを得ない。とはいえ、そうであるからといってハイティーンになってからの外国語学習がまるで無意味になるわけでは決し

---

4) 今井むつみ・野島久雄『人が学ぶということ』（北樹出版）92ページ。

でない。そもそも人間の言語習得に臨界期はありえないので、たとえ聞き取りの最適期は逸しているとしても、そのことを自覚した上で、なおそれぞれの目的に相応しいより適切な学習法を工夫することこそむしろ肝心なことであるように思われる。

#### 4 「創発」の機制と階層構造の意義

先に紹介した通り、動作構築のレベルに関するベルンシュタインの見解は、四層にわたる階層構造をモデル化するところにその特徴が窺われたが、このこととの関連で今ひとつ注目しておくべきは、運動的課題の遂行に当たってもまた、二つあるいはそれ以上の階層にまたがる運動相互の協応関係が作用するという点であろう。彼は、運動に対して最高次に位置するレベルを「先導レベル」とし、より低次の従属レベルとの関係を「背景レベルおよび背景調整」という用語を用いて考察しているが、そこでの核心をなすのは、先導レベルの課題を解決するためには、その要請に応え技術的な補助の役割を果たす従属レベルの運動スキルが不可欠とされている点であろうと思われる。その際、先導レベルは「背景レベルの操作性を組織化する」(300ページ)とされるが、協応性をもつ背景調整は、自動化され「いつも意識下で作動」(299ページ)するようではなくてはならない。こうした先導レベルと背景レベルとのダイナミックな協応関係を考える構図は、さらに興味深いことに、ポランニーの見解とも一致して、「暗黙知」の構造と「創発」の機制を考える恰好の手がかりを提供してくれるものとなっている。

マイケル・ポランニーもまた、「暗黙知」に裏打ちされた高度な技能の達成には、焦点的感知だけでは十分とはいえず、焦点化された諸細目が、より高位の包括的全体相へと統合されることこそ重要であると論じているが、ここでも、低位レベルにおける補足的作用の意義が忘れ去られているわけではない。ここでは、『知と存在』(晃洋書房)を参照例として、包括的存在と細目との関係について再考してみたい。

ある技能を学んだり、あみだしたりすることは、感覚の技能であっても、筋肉の技能であっても、本質的に首尾一貫した作業である。それは首尾一貫した問題を解決することに着手し、これの精通に向けてのどんな進歩も、あらかじめ見通された概要の本体を満たすことにほかならない。このような見通しに導かれない任意の試行錯誤では、技能的な実行行為にまでけっして至らないであろう。(260ページ)

---

5) 柴田庄一・遠山仁美「技能の習得過程と身体知の獲得 主体的関与の意義と『わざ言語』の機能」(『言語文化論集』 巻 第2号、79ページ)

何事であれ、そもそも「技能」とは、「一定の制約条件をそなえた環境（ないし状況）において特定の目的意思をもって遂行される実践的行為およびその能力」<sup>5)</sup>に他ならないので、まずもって志向的目標を明確にし、目的に合致した行為を差し向ける対象に対して何らかの見通しを持つことが第一の前提要件をなすと言える。もっとも未踏のレベルの予知には、後にも検討するように、想像力の関与が欠かせない。ポランニーもまた、逆さメガネの実験を論じた件で、たとえば次のように述べている。

逆さまの像を見る正しい方法をもたらすのは、目前の光景を制御するような方法で、視角を再解釈しようと努めている想像力の努力である。これが暗黙的認識の力学である。すなわち、まだ補足的な個々の項目に立脚していない諸経験を漠然と予知している探求の想像力が、こうした補足的なものを喚起するのであり、こうして、想像力が達成しようと努めてきた経験を遂行するのである。（255ページ）

ここで「補足的なもの」とされるのは、いわば統合行為によって遂行されるべき包括的全体を下支えする諸細目であると言い換えることができる。とはいえ、諸細目があくまでバラバラな細目にとどまるかぎり、経験の首尾よい遂行には至らないので、暗黙知の体得はおぼつかない。その際、目標達成を志向し、上位レベルへの飛躍を試みる統合行為を触発する上で重要な役割を果たすのが、どうやら想像力の働きということになるようだ。すなわち「活発に働く想像力には、主体が定焦点的には気づいていないような精巧な諸規則を補足的に実践することによってその目的を遂行する能力がある」（256ページ）からである。こうして、「わたしたちが包括的存在を知るのは、その諸部分へ潜入することによってである」（274ページ）が、「潜入する」とは、低位の諸部分を焦点的感知としてでなく、あくまでも補足的感知として活用し、それに依拠しつつより高次の目的を達成することにより、つまるところ下位レベルが背景化されることを意味している。したがって、暗黙知化の機制は、このような上下二層の協応関係が十全に機能することによって初めてはたらくものであると考えられる。

## 5 主体的関与と想像力の役割

すでに前稿でも指摘したように、通常、技能の習得過程で用いられる指導言語は、分析的指導言語 イメージ的指導言語 ピンポイントでの修正ないし後押しを行う「わざ言語」という一連の順序が観察されたが、わけてもイメージ喚起的言語による指導が重きをなすのは、まさにこの段階こそが学習者の主体的関与を引き出すに当たり不可欠の要諦をなすからに他ならない。とはいえ、イメージ形成の重要性は、ひとえに主体的関

与と不可分に関連するがゆえばかりではない。

たしかに人と場のいずれをも欠かすことのできない前提要件とする技能の習得は、当事主体の関与がなければ叶わないが、さりとて、そのことは、ただ単に自我の意識的関与があればそれで充分だということを意味しない。ただ闇雲に達成を目指して力んでみても、さほど功を奏さない場合が少なくないばかりか、かえって害になることの方が多い。なぜなら半可通や未熟であることに基づくズレや歪み、意識のし過ぎや囚われることに起因する硬さやこぼり等が避けられないからである。そうであれば、肝要なのは、むしろ単に分析的なだけでは果たせない包括的統合をいかに可能ならしめるかの方策を探るということであり、その際、最重要の役割を果たすのが、感性と悟性を媒介するものとしての想像力に他ならない。<sup>6)</sup>

一般的に言って、技能の習得を有効なものとするためには、まずもって何をなしとげたいのか、目的は何なのかを明らかにするとともに、目標を達成しようとする強い意志を持たなければならない。その際、かくありたい、こうであってほしいという対象が常に分明であるとは限らない。とはいえ、たとはっきりとした確信は持てなくても、ありうべき理想像を予感し、志向的目標を思い浮かべることは最低限必要なことであり、そうした役目を担うのは、まさしく想像力以外ではありえない。

そもそも想像力は、現実世界に（いまだ）現前していないものを表象するところにそ

---

6) このところ、大脳生理学の分野でも、繰り返し右脳のはたらきが注目されるようになっているが、これもまた、改めてイメージ力が重要視されるに至った証左と言えなくもない。たとえば、『覚える技術』（翔泳社）の著者アルベルト・オリヴェリオは、「右脳と左脳のしくみ」について、「大脳の左右両半球には、それぞれ異なる機能がある。左脳は大部分の人において、話し言葉や書き言葉など、言語中枢があるだけでなく、論理・抽象的なタイプの諸活動にも関係している」、「それに対して、右脳は類推的な思考や創造力、時間・空間的な認識などに関係している。したがって、大脳の両半球は異なる方法で現実世界を認識し、それを頭の中で組み立てることに貢献している」（99ページ）とした上で、次のように述べている。「左脳は右手の動きや話し言葉、書き言葉、さらには筋道を立てた論理、抽象的で理知的な理論の組み立てなどをコントロールします。一方、右脳は視覚化された全体的なイメージを抱いたり、類推を働かせること、感情的で芸術的な知性の表現、言語の感情的なイントネーションなどにかかわっています。たとえば、意味論的（言語的）な情報や記憶は、左脳の側頭葉や海馬で解読され、視覚的、空間的な記憶や情報は、右脳の同じ領域と前頭葉皮質の部分が関与しているのです。これに対して、聞き覚えのある音の認識や音楽的な記憶などは、右脳の後頭葉が関与しています。」（97ページ）つまり、左脳が、論理的・抽象的な理知的思考を司っているとすれば、右脳は、主としてイメージ的思考に基づく類推や創造力に関係しているとされるのである。ただ、ここでも急いで確認しておくべきは、このように二分法で語られるところに重要なポイントがあるのではなく、肝心なのはむしろ両者の有機的な媒介関係にこそあるという点であろう。

の本質的な特質を持っている。したがって、技能の習得に際して必要となる、体得すべき「型」を構想し、目標達成への主体的投企（パーソナル・コミットメント）を誘発することもまた、想像力の大切な役割であるとしなければならない。

たとえば、何らかの手本をモデルとし、それを模倣する場合を取り上げてみても、単なるオウム返しをもって良しとするのならいざしらず、何がしか創造的に再現する段になると、細部の分析的な認知だけでは充分とは言えない。模倣するモデルの中に学習者自身の像<sup>イメージ</sup>を投入し、自己モデルへの置き換えを図ることで、ようやく自らの個性に見合った身体感覚の調整が可能となるのだからである。<sup>7)</sup> そのような準備段階を経て目指されるものこそ、諸細目相互の布置関係を探りつつ、個々の細目に対する焦点的感知を補足的感知へと構造転換し、もって一段階上位層への包括的統合を可能ならしめる「創発」への跳躍であると言っていい。その時、想像力は、隣接的な類縁関係だけにとどまらず、一見無関係に見えながら、実は深層において密接な関連を有する諸要素同士を類推的に繋げる効用を持つがゆえに、下位項における技能相互の協調態勢を構築するに与<sup>あずか</sup>って大いなる貢献をなすものと考えることができる。

むしろ当然のこととして改めて言うまでもないことではあるが、何事によらず、ただあらまほしきイメージを思い浮かべるだけで、都合よく事が運んでくれるほど、「身体知」の体得は生易しいものではない。上達への意欲を首尾よく実現するためには、基礎感覚を磨くとともに、粘り強い反復練習を通して熟達に資する基礎技能を十二分に習得しておくことが不可欠である。その上で、より上位の技能へと注目を移すとともに、試行錯誤を重ねながら下位技能の協力的な微調整を図ることが求められるが、その際、すべてを意識的に差配しようとする、思うような飛躍は期待できないことが多い。むしろ意識的にコントロールできない範囲で内圧を高めることが、からだでおぼえる「身体知」の体得には不可欠であるように思われる。それというのも、学習した意識知は、いったんは無意識過程を通過させることにより、文字通り「暗黙知」として自動化しうる端緒が開かれると見なすことができるからである。

このこととの関連でさらに注目しておいていいのは、睡眠時における学習機能という現象であろう。睡眠が、覚醒時の意識によるこわばりを緩和し、脳の緊張を解き放つのは周知のことであるとしても、「身体知」を体得するに際し意識下の関与がもつ効用もまた、決して無視し得ないものであるように思われる。とりわけ、これ以上如何<sup>いかに</sup>ともしがたい事態にまで行き詰まった段階で、すなわち閾値<sup>いき</sup>に達しようとする<sup>まさ</sup>将にその刹那、もつれあった諸要素の葛藤を解きほぐし、相互の結びつきを再編成する上で、睡眠は、

---

7) イメージ形成と身体知が不可分の相関性をなすこと具体例として、たとえば珠算有段者による暗算の仕方や指揮者等による総譜の暗譜法を挙げることができよう。

少なからぬ効果をもつものと考えられる。それはまた、古来、ヨーガや座禅に見られる東洋的な身体訓練の方法論や精神修養にも通い合うものでもあって、いわば日常的存在としての「自己」を「放下(=現象学的還元)すること」を通して改めて無意識領域を活性化するひとつの試みに<sup>かて</sup>算えることができるかも知れない。

## 6 直観とイメージ形成の可能性

ところで、想像力によるイメージ形成について考える際、もうひとつ見落としてならないのは、「直観」との親近性がいかに強いかという観点であろう。ポランニーもまた、才能にめぐまれた科学者とはどういう存在であるかについての考察の中で、「予測的直観の力」こそ「潜在的可能性の徴候を統合する能力」(259ページ)であり、「想像力が直観によって純化されて導かれるときにその目的を遂行する」(259ページ)のだと述べており、両者の強い相関性に対する目配りを忘れてはいない。ポランニーにとってもまた、「直観とは、科学的な探求の初めから終わりまでどの段階でも起こっている統合行為を意味して」(257ページ)いたのである。

同じことはまた、対局の流れを読み、陣形や形勢を<sup>にら</sup>睨んで瞬時の判断を要求される棋士の心境にも通じ合うものであろう。谷川浩司の『集中力』(角川 one テーマ21)によれば、「将棋の大きな要素は、指し手を考える つまり『読む』こと」(88ページ)であるとし、次のように書いている。「将棋は、相手から取った駒を再度使うこともできるので、指し手の可能性は非常に多く、一つの局面で百通り、多い時には二百通りという指し方が考えられるようになる。その全部の先を読むのは時間の制限もあり、とてもできない。私の場合、まず、百通りからある指し手の中の九十パーセント以上の手は読まないで捨ててしまう。三十数年の蓄積と経験から、不要な手が瞬間的にわかり、同時に、直観によって、三通りから五通りぐらいの手が頭に<sup>ひらめ</sup>閃くのである。」(88ページ)このとき、直観によって読む場合の「判断基準は感性」(92ページ)であるが、感性を磨くには、「まず覚えること。それから、いったん白紙に戻して、自分の頭で考えることである」(120ページ)と言い、「大切なのは情報量よりも閃きや判断力」(127ページ)であるとされる。もっとも、何らの蓄積もないのに都合よく天啓がもたらされることなどありえないので、「いくら創造力や企画力を働かせようとしても、道具となる知識や材料となる情報がなければ何も始まらないのだ。知識は、頭の中に<sup>たくわ</sup>貯えられた記憶の体験が土台となるのである。つまり、創造力やアイデアの源は、頭の中の記憶の組み合わせから生まれるもので、その土台がしっかりしていなければ、良いアイデアが<sup>ひらめ</sup>閃くわけがないのだ」(136ページ)とされる点も、また決して忘れられてはなるまい。

さらにもうひとつ、将棋の対局経験から生まれた述懐として注目されるのは、「何事

であれ、何かを習得しようと思ったら、体に染み込むまで練習やトレーニングに励むことではないだろうか」(144ページ)とした上で、「将棋に限らず、勝負事やスポーツの上達では、実践で学ぶことが基本だ。手とり足とり戦法を教わるのではなく、実践の数をこなして体で覚えることが大切なのである」(133ページ)と強調される<sup>くだり</sup>件であろう。ここには、数をこなした現場体験と真剣勝負の実践訓練こそがもっとも重要であるという「身体知」を体得するに際しての心構えが語られている。

それゆえに、俗に「勘がはたらく」ということの意義もまた、「身体知」に代表される技能の熟達にとって、どんなに強調してもし過ぎることにはならない筈である。そこでは、単に知識の多寡だけが問題となるのではなく、それぞれの局面において何が必要で、何がそうでないかを瞬時に見分け、しかるべき行動を起こせるか否かが問われるのだからである。

適切な状況判断を下すには、まずは具体的な文脈に身を投じ、きょくりよく現場の環境と同調・同期する行動が不可欠の前提としてなければならない。ところが、相撲やサッカーや野球といった対戦相手のある競技において、単に流れに同調するだけでは相手のペースに巻き込まれ、ただ翻弄されるだけに終わってしまいかねない。そのような場合には、競技現場への首尾よい「潜入」を果たしつつも、リアルタイムで相手の出方や間合いを読み、戦法をはぐらかしては動きをかわし、また当初の方略を立て直して相手陣営を攪乱するなど、即興的な対応を求められることが少なくない。そこでもまた、直面する状況や文脈に即応し、「先を読む」という志向的判断を直観的に下すことがきわめて重要な役割を果たさざるを得ないのである。<sup>8)</sup>

---

8) 天才的(若しくは動物的)な勘が冴え渡るパターン化しにくいケースのひとつとして、しばしば天才バッター・長嶋茂雄の事例が取りざたされるが、巷間伝えられるところでは、彼は、まるで何も考えず、ただただ来た玉を打っているだけ、などという揶揄的な冗談が、かつてまことしやかに語られたことがあった。仮に、その通り、相手投手の球種や球筋を予め読んでいなかったのだとするならば、もとよりこういう人の「ウラをかくこと」など到底ありえない道理となるうが、実は、その謂いは、ひとえに好球必打ということに尽きるのであって、その間の事情について、自伝的著作『燃えた、打った、走った!』(中公文庫)が次のように伝えている。すなわち、「ワンちゃんは投げた瞬間からバットとストライクとボールとを判断し、ストライクだけを打っているらしい。ぼくは最初から全部のタマを打ちにかかり、途中でボールと見たタマを捨てるタイプ」(251ページ)だったというのである。その裏打ちとして、血を吐くような不断の努力があったこと、また、直観に導かれる「コンピューター」の瞬時のはたらきがあったことは、もとより改めて言うまでもないことである。

## 7 「閃く」とはどういうことか

直観的な判断が「流れ」を読むことから生まれることは先に述べたが、そのことは、逆に言えば、何がしか動くものが契機とならなければ、「勘がはたらく」という僥倖に恵まれる事態も容易には生じえないことを示唆している。すなわち、何らの予備的練習もなしえていないまったく白紙の状態ですべて「上達」を志向すること自体、そもそも無理な相談であるのは当然であるとしても、すべてに安定自足した停滞状況において「飛躍」や「上達」を希求してみても、それもまた、とうてい叶わぬ夢でしかない。

たとえば、競技スポーツにとって、技が安定するということは、一面では慶賀すべきことには違いないが、それは同時に、そのままでは、ルーティーンにもなりかねず、もはやこれ以上記録の伸びが期待できないことをも意味している。したがって、こうした行き詰まりを打開するためには、改めてフォームを変更したり、さらにスピードを上げるべく新たな試みがなされなければならない。それは、いまだ経験されざる未知の領域への挑戦であるがゆえに、予め成功が保証されているわけではもとよりない。とはいえ、飽くなき上達を目指すためには、場合によっては危険とも決して無縁ではない「揺らぎ」を導入することが必要不可欠なのであって、ただ安定しているだけではもはや大きな飛躍などとうてい望めない道理と表裏一体をなしている。

では、そもそも「閃く」というのは、いったいいかなる事態を指して言うことばなのだろうか。そうした事態を招来するためには、おそらくクリアすべきいくつかの前提条件があるものと想定される。一般論としては、達成すべき具体的な目標とその技能を試すに好適な場が得られること（外的条件）、および目標をしっかりと見定め、挑戦する人材に予めそれにふさわしい基礎技能が備わっていること（内的条件）の二つを挙げることができる。前者の重要性については、オリンピックや世界選手権といった大きな大会ごとにきまって新記録ラッシュとなる事実からも確かめられようが、後者については、事は必ずしもさほど単純とはいえない。

まずひとつ、明らかなのは、上達を支えるに足りる知力や体力の訓練と各種基礎技能の習得が徹底して行なわれていなければならないということである。何らの蓄積もない無の状態から「閃き」が生じることなどありえない関係である以上、前もって十分なトレーニングを積み重ね、とことんまで思考を煮詰めておくことは、何を措いてもまず必要なことである。とはいえ、基礎技能さえ身に付けているならば、それで万事めでたしなのかというと、必ずしもそういうわけではなさそうだ。なぜなら、上位層への「飛躍」を有効ならしめる下位技能同士の協応態勢を築くには、相互の背景調整の任に当たる部分の訓練もまた同時に怠るわけにはいかないからである。その役割を担うのが、どうやら想像力であるらしいことは先述したが、併せてその核心のひとつに感覚調整が含まれ

るので、達成目標に呼応した実践的な<sup>トライアル</sup>試行錯誤と微調整の試みを繰り返すことにより、<sup>センス</sup>感覚を磨きあげることもまた必須の要件となつてこよう。したがって、直観や「閃き」の契機が見出されるのは、二つ（若しくはそれ以上）の階層にまたがって、継起的ないし持続的になされる目的志向的な探究や粘り強い模索の過程においてのみということになりそうだ。

陸上競技・短距離走の第一人者であった高野進は、『栄光への助走』（集英社 b e 文庫）の中で、モノをいうのは「結局は想像力」（152ページ）であるとし、「頭の中でいちいち計算するんじゃなくて、本人が感じ取ってそれを変えていくということ」（141ページ）が大切だとした上で、感覚調整の重要性について、たとえば次のように述べている。「自分の感覚にマッチしたら、そこでまた、動きがドンドン閃くんですね。だから適切な刺激を与えると、私の想定範囲を超えて、ドンドン自分で先へ先へと行ってしまふですよ。」（141 - 142ページ）ここでは、感覚調整が動きと連動しているだけでなく、両者がマッチすると、今度は、動きが自動化し、また「ドンドン」と閃きを生み出してゆくというダイナミックな相互関係が語られている。これもまた、「暗黙知」の生成様態のひとつと言えるだろう。

ところで、このような臨界で生じる感覚調整は、単なる理屈でなく、身体に染み込ませた統合作用に他ならないので、練習やトレーニングの現場においてもまた、もうこれ以上は<sup>にっち</sup>二進も<sup>さっち</sup>三進も行かないという臨界状態を経験しておくことが必要であるかも知れない。禅宗の公案に見られるように、合理的思考では解決できない無理難題をふっかけるのも、あえて不安定なカオス状態を作り出すことで、細目の分析を超えた直観的な総合判断と跳躍への決断を迫る仕掛けのひとつと考えることも許されよう。そこで求められるのは、選択肢のすべてをくまなく冷静に分析することではない。むしろ多様な角度からの検討は不可欠だが、そのことを前提とした上で最終的にポイントや最適値を判定するのは、いわば直観に導かれた身体感覚とでも言うべきものであり、それこそが、諸技能の協応関係を調整しつつ予測の範囲を超えた、より高次のレベルへの包括的統合（＝「創発」）を可能ならしめるのだと言っていい。

ギリシャ悲劇まがいの破滅型仁侠映画『総長賭博』（昭和43年）の脚本をものしたシナリオライターの笠原和夫もまた、『映画はやくざなり』（新潮社）所収の「秘伝 シナリオ骨法十箇条」において、脚本に取り掛かる時の要諦をまとめた件で、「プロットまでの行程は冷静な頭でいなければならないけれど、ここから先は、冷静なままでは一行も書けやしない。ドラマというのは正気の沙汰の人物の話ではない。こっちの頭も狂ってこなければ、セリフ一本、らしくは書けない。（改行）だからブラブラしはじめる。来る日も来る日も酒くらって寝ることを続けたりもする。」（135ページ）そして「さ、ほどよく狂ってきたと判断したら、書き始める、一気呵成に、筆の赴くまま、自分の好

きなように、云々」(136ページ)と書いている。一見、特異ではあるものの、ほとんど全身の行為とも見まがうほどの執筆体験に基づいた一つの識見と言うべきであろう。

このように見てくると、「閃く」とは、まさに狂気とも紙一重の、とんでもないシロモノであるかにも思えてくるが、それまでいくら試行錯誤を重ねてもなお達成しあぐねていた諸要素の統合が、不意に最適な結びつきを得て実現されることがあり、そのときの機制を、われわれは、「閃いた」と称しているのであって、実は、的確で過不足のない情報処理が行なわれ、そのことの帰結として、新たな実践知の基礎が形作られたことを意味している。こうして得られた「身体知」は、換言すれば、統合的な感覚調整に立脚したもので、いわばニューロンやシナプスレベルにこれまでにない連結が成立し、新しい神経回路網ネットワークが開発されることにも等しいと見なすことができるかも知れない。そうであれば、いったん身体の一部ないしはその延長として身に付いた楽器や道具の使い方が、習得後そう易々とは忘れ去られたりしないのも、また当然の道理であろう。それはまた、熟達段階に達した「わざ」の確認には、イメージトレーニングだけでも有効なことがあり、他方では、成功イメージの再現がスランプの克服に有益であったりする所以ともなっている。<sup>9)</sup>

## 8 集中力のはたらきと Zone への突入

くりかえし考察してきたように、最高度の身体知(=暗黙知)は、決して分析や意識的なコントロールのみによって体得できるものではない。それは感性や想像力とも不可分であり、また直観や「閃き」の領分とも密接に関連している。したがって、とりわけ「創発」と呼ばれる未踏の領域への飛躍には、しばしば失敗や狂気といった危険がつきまとう。ただ律儀に練習を繰り返せば、どうやらそれで能事終われりというわけにはいかないようなのである。ましてや、理屈や「頭」による学習に終始したのではとうてい

---

9)「閃く」ことが、最適値を感知することと無関係ではないとすると、同じことはまた、「コツを掴む」という行為にも当てはめることができるかも知れない。「コツを掴む」とは、比喩的に言うなら、たとえば100の目盛りがある内で、ポイントが87であるとすれば、そのポイントを的確に掴むことを意味しているとしても、それは決して分析的認知にとどまるものではない。作業の現場やプレイヤーの身体的諸条件に適合したコツを掴むには、どうしても自己と「わざ」との一体化が不可欠であり、それは環境に「潜入」することによってこそ得られる「身体知」の獲得でなければならない。

10)じじつ、暗黙知を文字通り「暗黙」知として十全に機能させるためには、なお注意すべきデリケートな論点が少なくない。「暗黙知」の構造ならびに「創発」のメカニズムの本質に関わる課題については、いずれ稿を改めて本格的な論題とする予定である。

習熟は覚束ないとされ、意識に囚われることのないイメージ的統合こそ重要となれば、そもそもどのような学習法が有効なのか、とかく途方に暮れざるを得まい。<sup>10)</sup>

とはいえ、学習者の立場に立てば、たとえ生易しいことではなくても、何とかして上達の方法をわがものとし、「身体知」を体得するすべはないものかと思案するのも、また無理からぬところであろう。最後に、いくつか具体的事例に取材しながら、とくに「集中力」のはたらきについて若干の考察を加えてみよう。

先に、これ以上身動きが取れない臨界の経験について少し触れたが、「火事場の馬鹿力」という言葉もまた、不測の事態において思わぬ能力が発揮されるありようを指摘したものである。むろん火事の現場に直面し、茫然自失することも珍しいことではない。けれども、無我夢中で行動することにより、普段の日常からは予測すら難しい潜在能力が、にわかに顕在化することがあるのははたしてどうしてであろうか。

夢中になることの効用は、何事であれ好きなことに打ち込んでいる場合にもっとも顕著にあらわれる。ここでのポイントは、文字通り行為に熱中することで、意識的自己が放下され、対象との一体化や世界への全き「潜入」が実現していること、そのことでエネルギーの無駄な浪費が抑えられ、期せずして身体知の集中とリラックスすることによる直観的統合が達成されやすい点に見出される。<sup>11)</sup>

あるものに集中するということは、別に言えば、無意識の裡にではあれ、それ以外の夾雑物を排除し、不要な情報を遮断しているということでもあり、たとえばコンピュータに対する一種のフレーム化に準えることが可能かも知れない。<sup>12)</sup>

このような夾雑物の遮断という機制はまた、ありあまる雑音の中から必要な情報だけをピックアップする際にも発揮されているようだ。たとえば、口交々に語り<sup>こもこも</sup>が交錯するパーティー会場にあってさえ、ある種のひそひそ話だけは、容易に聞き取られることがあるのも、こうしたメカニズムが働いているためであると考えられる。「火事場の馬鹿力」が功を奏するとすれば、それもまた、緊張をバネに集中力を高め、まさにピンチをチャ

---

11) リラックスするということの意義はまた、単一の固定した制御から解き放たれ、新たな目標課題にも柔軟に応じうる協応態勢を整える余裕を持てることであると、言い換えることもできる。

12) もっとも代表的な具体例として、思考や行為に熱中している最中<sup>さなか</sup>にあっては、いかなる雑音も気にならないという事実を挙げることができよう。また、人間には、「火事場の馬鹿力」が多様に発揮されることにも代表される通り、たとえ不測の事態に立ち至っても、フレーム外の直観が働く場合が少なくなく、必ずしもコンピュータと同列に論じられるわけではない。このように、そもそもインプットされた情報が想定していない状況への対応はコンピュータがもっとも不得意とするところであって、階層の転換に即興的に処するというはなれわざは、今のところコンピュータには十全にはなしえない難事であるように思われる。

ンスに転換する潜在的な<sup>りょりょく</sup>膂力の賜物に他なるまい。

とはいえ、ここでも確認しておくべきことは、たとえ直観的にはあるにせよ、今、何をなすべきか、この場に必要なのは何であるかの適確な予測的判断が下され、志向的目標が見定められていなければならないという点であろう。目的のない行動は、ただ単に慌てふためく狼狽をもたらすだけで、統合的行為に結び付くものではない。先にも検討したように、低次のレベルが補足的感知へと組み替えられ、首尾よく上達への協調態勢を築くことになるのも、より高次の目標達成に資するよう技能相互の構造変換がなされることと相即している。したがって、そのためにも、まずはしかるべき目標が設定されること、次いではその実現を目指してそれに相応しい主体的関与がなされることが基礎的土台とならざるを得ないのである。<sup>13)</sup>

ところで、集中力を高める試みの一環として、古来、呼吸法や瞑想法といったさまざまなエクササイズが考案されてきたが、そこにおしなべて見られる共通項は、緊張と弛緩をどう調和させるかの工夫にあらう。それはまた、能動性と受動性をともに生かす方途を探るということでもあり、「暗黙知」の体得というわれわれの関心に即して言えば、一方では、志向的目標への焦点化を高めつつ、同時に、下位レベルの技能や場との一体化を図るといふ難問をいかに効果的に解決するのかという課題でもあらう。

吉井妙子の『神の肉体 清水裕保』(新潮社)には、スピードスケートの競技に臨もうとする選手が、どのようにして集中力を高める努力を行っているかの具体例が紹介されている。それによると、清水裕保は、「人間が日常では体験できない未知なる能力を発揮する領域に入った時に使う言葉」(111ページ)を ZONE と呼び、そうした ZONE へと突入するため、次のような工夫を凝らしているのだという。すなわち「清水は、スタート十分ほど前から、ある儀式をすることを常としていた。言うなら、脳の視床を人為的に開き、人間の潜在能力を引き出す ZONE の世界へ自分を入れる作業の終結の詰めをやるのである。それが成功した時には、真空管に閉じ込められたようになって、自分の滑るべき理想の光のラインが見えるのだと、清水は言う。」(56ページ)「理想の光のラインが見える」とは、「最高のパフォーマンスが発揮できた時は、回りから音が消え、真空管の中に閉じ込められたような感じになって、滑るべき光のラインが現われる」(156ページ)ことだと説明されているが、それは、集中力のはたらきによって内圧が極限にまで高まると、自他の合一が十全に果たされ、その上で向かうべき目標が直観に導かれるようにして浮上してくる事態を言い表わしたものと言えるだろう。競技現場への

---

13) この場合、技能の階層構造に関連して、その全体相が俯瞰され、その上で逐次的な階層性の認知がなされていることが望ましい。より上位への統合とはいっても、あまりにも高い目標設定は、ギャップがありすぎてほとんど達成不可能だからである。

全き「潜入」こそ、「暗黙知」が存分に発揮されるための前提条件をなすものであることは、ここに改めて繰り返すまでもないであろう。

さらに興味深いのは、部分的認知と全体像との関係が、どうやら次のような表現の内に語られていると目される点である。ここには、「身体知」の体得と不可分であるらしい「集中」と「自己放下」との関係が、そしてまた、おそらくは、焦点化と統合を直観的に達成することの前提が、微妙な言い廻しによってではあれ何とか言い当てられようとしているかのように思われる。<sup>14)</sup>

一点を見ているようで全体を見ている。だから全体がぼやけてしまう。つまり一点は見えていないんですよ。全体を見ているんだけど、一点がフォーカスされたように浮き彫りになっているんです。(156ページ)

---

14) 『神の肉体 清水裕保』が伝えるところでは、清水は、先に紹介した室伏重信の所見とは対照的に、「既存の筋肉を破壊するトレーニング」(127ページ)さえ試みているのだという。それは、「筋繊維の数は、生理学上増やせないのであれば、筋肉を壊し再生させることでその一本一本を太くし」「作り変えるという発想」(132ページ)による実践行為でもあり、いわば逆転の発想に基づく捨て身のトレーニングとでも呼ぶべきほどのものである。